

# 地球一周の船旅 2016 ⑤

## 【アメリカ編】



2017年2月

旅のチカラ研究所 植木圭二

地球一周の船旅を2016年4月12日～7月26日の106日間で行ってきた。既に旅行記は出航準備編、アジア編、南ヨーロッパ編、北ヨーロッパ編を発表してきた。

今回はアメリカ編として南北アメリカのカナダとラテンアメリカ諸国、海でいえば北大西洋からバミューダ海域、カリブ海、パナマ運河、太平洋までをまとめた。

### 第一章 セントローレンス湾

#### ■セントローレンス湾突入

6月14日朝にラブラドル半島とニューファンドランド島間のベルアイル海峡を通過する。この海峡からセントローレンス湾になる。

私たちの船室は左舷後部にあり、ニューファンドランド島を間近に見ながらの航海になる。島といっても北海道よりも大きいので陸地が延々と続く。島にはそんなに高い山はなく、緑もあって所どころ建物も見える。グリーンランドとは島の様子がだいぶ違う。

ここはセントローレンス川が流れ込む湾で、セントローレンス川の上流に北米の五大湖があり、五大湖はつながっているが最終的にはオンタリオ湖から流れ出ている。

赤毛のアンで有名なプリンスエドワード島はセントローレンス湾の奥にあるカナダで一番小さな州になる。この島はコンフェデレーションブリッジという大きな橋でカナダ本土と結ばれている。

現在北緯は49度21分で、日本の宗谷岬よりもかなり北にある。ちょうどサハリン島、日本名で樺太島の真中くらいの位置である。樺太はロシア領であったが日露戦争で日本が勝利したので北緯50度以南が日本領になった。その境界線の付近の緯度にあたる。

このセントローレンス湾は大きく、湾の入口のベルアイ爾海峡からプリンスエドワード島までは700kmくらいある。プリンスエドワード島に期待しながらゆっくり航海を楽しみたい。

正午現在の外気温は12℃、海水温は11℃なので船のデッキに出るとかなり寒い。

#### ■カナダを目指す航海

昨夜の居酒屋で、Kちゃんとの会話の中で英語の記述で筆記体はもう使われていないし、学校でも教えられていないということを聞いた。それを思い出して本日の英会話教室で先生に聞いてみる。先生と言っても息子よりも年下のカナダの青年である。

彼が言うには筆記体は現在使用していない。せいぜいサインする時に用いるという。クラスメイトのおばさんも、日本の公立学校ではもう教えていないという。私は知らずに筆記体で書こうとしていたので、時代が変わっていることをつくづく感じる。

洋上カラオケ大会なる催しが開催されている。28組の参加で各自カラオケを披露する。

英会話教室のクラスメイトが歌うので来てくれと本人から誘われる。曲目はシークレットだが熱唱するというので行ってみる。他界した奥さんへ捧げるということで気持ちが入っており確かに熱唱だ。

しかし如何せん持ち時間が2分間ということで盛り上がったところで終わってしまう。ちょっと残念であるが出演者はみなそんな感じで終わっている。NHKののど自慢を見ているようで、途中で切られるときのコケ方がこれも面白い。

カラオケというのは自分が歌うことが楽しいので、余程うまい人でもない限り長く聞くには耐えられない。その意味で2分間というのは妥当かもしれない。

#### ■プリンスエドワード島

6月15日いよいよプリンスエドワード島のシャーロットタウンに寄港する。カナダではプリンス・エドワード・アイランドは略してPEIと称される。

言わずと知れた作家モンゴメリーの書いた赤毛のアンという小説の舞台になった島で、だからアンはあくまでも小説の主人公である。アンの家などがあるから実在の人物と勘違いしている人がこの船でも多い。

世界第二位の国土面積のカナダの0.5%がPEIの広さで、それでも神奈川県の2倍くらいある。しかし人口は15万人しかいない。世界で一番きれいな島と呼ばれていて、その州都のシャーロットタウンもまたきれいで小さな街である。

バスで走っていると広陵とした畑が多い。最高標高140mというのだから全てが平地といっても良い。神奈川県は半分以上山なのにPEIは100%平地とは土地の利用方法が全く異なる。

現地ガイドの話ではこの島の産業は1に農業、2に漁業、3に観光という。

観光は当然としても農業の主要作物はジャガイモで、PEIポテトと呼ばれている。ジャガイモは土地の肥料の関係で3年に一回くらいの周期で栽培するので、自分の土地を3等分してジャガイモを栽培したり、寝かせたり、別の作物を栽培したりというローテーションを組んでいる。そのため上空から見ると畑がパッチワーク状の模様になっているのがわかる。

漁業はロブスターがとても有名ということで、至る処にロブスターの看板が目にとまる。ここ PEI ではロブスターの乱獲を防止するために漁の時期を決めて、さらに漁には免許が必要という。免許の数が決まっています、誰かが引退しないと免許が回ってこない仕組みでちょうど大相撲の年寄り株のようなものになっている。

この免許はとても人気があって、5000 万円以上するらしい。理由はロブスター漁の時期が春から夏にかけて 3~4 ヶ月くらいしかなく、そして高級食材なので高く売れる。1 年の収入がその期間で得られるから極めて効率的な仕事ということになる。

昼食にはロブスターをいただく。30cm 以上の大きなロブスターを一人一匹ずつ食する。

ボイルして冷やしたもの手で割り、カニフォークのようなものを使って食べる。味付けは適度な塩味がついていて実に旨い。しっかりと肉があり日本でいうと大きなカニ一匹をたいらげる感じである。同じ甲殻類だからカニに似ている。

同席した中高年女性からカニと比べてどちらが旨いかと尋ねられる。私はいい勝負でしょうと答えていたが、タラバガニやズワイガニよりは旨いと感じた。身が引き締まっているので触感が良い。でも毛ガニの方が上かなという印象である。やはりカニは毛ガニでしょう。

ここ PEI がロブスターの産地というのはここにきて初めて知ったことである。



### ■ 赤毛のアンの家

赤毛のアンはモンゴメリーの原作で原題名はアン・オブ・グリーン・ゲイブルズである。直訳すると「緑の切り妻屋根のアン」になる。赤毛のアンという名前にしたことが日本でヒットした要因の一つと思う。やはりネーミングは重要である。

その緑の切り妻屋、グリーン・ゲイブルズという観光名所が PEI にある。赤毛のアンの小説に出てきたアンの家を再現させて土産物屋やコーヒーショップを併設させた小さなテーマパークのようなものである。いやテーマパークとしてはあまりに小さい。何しろ見せるものは家一軒である。

そして当然ながらグリーン・ゲイブルズつまりアンの家には立ち寄る。既に観光バスが数台きており、観光客でごった返している何しろ家一軒である。

2 階建ての緑の切り妻屋根の家で、今風な表現をすると 1 階は 2LDK、2 階は 5 寝室で小説と同じように家の中には小道具が置かれている。真鍮ベッド、壊れた石盤など、アンファンなら

ば大感激する。私の娘も大ファンだったのできっと感激するに違いない。

この家の前で赤毛のアンを装った女の子がいたので記念撮影までしてしまう。きっとスタッフかアルバイトであるが、彼女は運動不足らしくやや太めなので「太めのアン」と名づける。けれども愛嬌のある顔がとてもかわいかった。



さてこの家、どこかで見たことがある。船の食事の前に座ったおばさんの話ではこの家は日本から移設したという。昔、北海道にカナディアンワールドというテーマパークがあって、そこには赤毛のアンの家があった。このテーマパークが何年かで経営破たんし、使わなくなったのでカナダのここにアンの家を移設したという。

そうだとすると私たち家族はカナディアンワールドに行っているのだから既にこの家を見ていることになる。日本に帰ったらこの情報の裏をとりたい。

帰国後に調べたらこの話は嘘ということが判明した。現在は北海道芦別市がカナディアンワールドを引き取り、公園として無料開放している。そして今も同じようにアンの家がある。注目すべきは家の外観や内装、調度品もそっくりである。芦別市に行けばここ PEI とほぼ同じものを見ることができる。

このグリーン・ゲイブルズを囲むようにゴルフ場がある。私たちがアンの家を見ている間地元のカナダ人がゴルフをしている。こんなきれいなゴルフ場でプレイできるとは、うらやましい。

帰りのバスの中からモンゴメリーの墓を車窓観光する。墓地の前でバスの速度を極端に落としてもらい車窓からではあるが写真を撮る。墓地の中でもモンゴメリーの墓は別格で緑の二本の木に囲まれ、案内板まである。彼女こそはこの島の 3 つ目の産業である観光を生んでくれた立役者なのである。

#### ■シャーロットタウン

シャーロットタウンに戻り、今度は港からダウンタウンまで歩いていく。ちょうど 10 分くらいなので街並みの見物を兼ねて散歩する。ヨーロッパの街はどこでも教会が街の中央にある。この街もニョキとした 3 本の高い塔のある教会があり、どこにいてもこの教会が見える。この教会よりも高い建物が建てられないという法律があるからだ。

街は緑にあふれて、道は碁盤の目のように整備されていて広い。北欧とはちょっと違うが裕福な感じがする。

このシャーロットタウンはカナダ発祥の地という。イギリスの植民地から自治を目指すカナダ連邦をつくらうという住民が 1867 年にここで会議をしたという場所を見る。

1867 年というと日本の明治維新前、ちょうど大政奉還の年になる。近代国家の産声は同じころに地球の反対側でも聞いていることになる。

今回の旅では友人へのお土産に、あるいは自分がゴルフの時にかぶるキャップを買い求めている。

ここ PEI でも買い求めたが、買う直前で断念している。20 個か 30 個を手に取り調べたが全てが Made in China である。中国で作ったものを PEI 土産として買う気になれない。

同時に中国のすごさを思い知る。イタリアのピレウスでは港ごと買い取られたとか、スリランカでは中国の港をつくっているとか、すさまじい。当然中国人観光客も多い。日本国内の観光地を見ても十分理解できるが、世界どこにいても至る処でそれを思い知る。

### ■痛々しい船体

船に戻ってきて、舷門をくぐろうとすると面白いものを発見する。

舷門とは船への出入口のことで、しっかりとしたタラップのある港では高い位置で出入りできるので 5 階の舷門を使うが、何も設備のない港では 3 階の舷門を使う。

飛行機に例えれば、乗り込む時に待合室の通路から直接乗り込む場合と、バスで滑走路を走って地上から階段を上って乗り込む場合があるようなものである。空港の設備に応じたものになる。

本日は 3 階の舷門である。ということは海と船の接触面が見えるので、北極圏を出て間もないころに流氷の中を進んだ時に船のペンキらしき青いものが流氷についているのを見たが、その船側の傷跡を見ることができる。

青いペンキが剥げた跡や流氷がぶつかって少し船がへこんだ跡の様子がわかる。結構へこんでいて、何やら痛々しい。流氷の力は侮れないことを再認識する。



### ■ひとり行方不明か

船に戻って夕食をしていると搜索騒ぎである。〇〇さん、船内にいらしたら連絡くださいという船内アナウンスが流れる。この船内アナウンスはちょっとおかしい、以前も船内放送で人探しをしていたことがある。

その時は寄港地で夕方に帰船してパスポートを船に渡さなかった人がいたのでスタッフがその人を探し回っていたのである。

ほとんどの国は乗客が寄港地に降りる前に寄港地の係官が船内にやってきて事前の入出国審査を旅行会社と係官の間で勝手に行うので、乗客は船内で使用する ID カードだけで船を降り街に出られる。だからパスポートは船に預けっぱなしで良い。

ところが一部の国ではパスポートのチェックを係官と対面で行うところがある。この場合はパスポートを携帯して観光になる。帰船した時、さすがに係官は全て対面できないので全てのパスポートの回収確認をして出国許可を与えるようになる。

スタッフが探し回ったのはパスポート回収をするためで、全員分がそろわないと出航できなかったからである。

さて、今回は事情が少し違うようで、居酒屋で飲んでいると情報がいろいろ入ってくる。

オプションツアーにバスで出かけたが、トイレ休憩と写真撮影のために 20 分くらいの時間があつたがバスに集合時間になってもおばさんがバスに戻らなかったという。おばさんというよりも話を総合するとおばあさんといった方がよさそうな年齢らしい。

45 分間かけてバスの乗客も一緒に探したが見つからずに、バスは船に戻ったという。実際に同乗したツアー客の話では迷子になるような場所でもないということらしい。

バスを間違えた可能性もあるので、同じ目的地に行った別のバスを調べたが該当者なしという。何しろ人数が多いので複数台のバスで同じ目的地に行くことがあるので別のバスに紛れ込んだ可能性を考えたようである。

ひょっとしたら何らかの方法で既に帰船しているかもしれないというので、念のために船内アナウンスを流したのを夕食時に聞いたということになる。船の入出門は ID カードを読み取って誰が船内にいるかという一元管理をしているので、本来ならばありえない。

そうするとあとは現地警察に捜索願を出すとか、スタッフで探すとかになるが、多分両方とも行いつつ、船は出航を待っているという状況らしい。普通は帰船リミットの時刻を過ぎて全員戻っていれば 1 時間もしないうちに発航になる。ところが今日は 1 時間しても出航の気配がない。

そして帰船リミットから 1 時間 30 分して、ようやく出航する。見つかったのかあきらめたのかは定かではない。あきらめるといって誰かスタッフを残すことになる。そんなスタッフは私の目では確認できない。見つかったので出航になったと思いたい。

それにしても、集合時間には早めに行っているとか、自己管理ができない人が多すぎるような気がする。乗客が高齢化して少し認知症が入ってきた人もいるようで、そのような人は一人での乗船は危険である。周りも大変であるが、場合によっては命にかかわることになる。

## 第二章 ガルフ・ストリーム

### ■ガルフ・ストリーム

北アメリカ大陸の東側はガルフ・ストリームと呼ばれる暖流が流れている。日本語ではメキシコ湾流と呼ばれているが、メキシコ湾の海水の関与は少ないという。この暖流のおかげで日本よりはるかに緯度の高いイギリスや北欧でも比較的暖かいという恩恵を北ヨーロッパにもたらしている。

海水温が上がってくるとサウナの冷水シャワーの温度も上昇してくる。おそらくは簡易に海水を真水化しているのだろう。この船のサウナには水風呂がないので冷水シャワーを浴びるがそのシャワーがぬるい。我々サウナー（これは造語）にとっては水風呂が快樂なのである。水風呂が無いのがそもそも問題ではあるが、冷水でないシャワーはいただけない。サウナ後に飲むビールが生温いようなものである。

この海流はかなりの速度で流れているので船のスピードにも大きく影響を与える。時速 4~5 ノットというと、自転車でゆっくり走るくらいのスピードである。

### ■ラテンアメリカとは

伊高さんというラテンアメリカの取材経験豊富なジャーナリストが、カナダから乗船したので、中南米やベネズエラの話をしてもらえるというので聞きに行く。

ラテンアメリカとは具体的にはどこを指すのか。ラテン語を話すアメリカ大陸の国々ということになるが、そしてラテン語とはかつてのローマ帝国の共通語ということで、現在の言語ではイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語などになる。そしてアメリカ大陸でそれらの言葉を話す国はメキシコ以南の国は 33 カ国ある。ただしスリナムとガイアナは公用語がオランダ語と英語なのでこれらを除くと 31 カ国になる。

次の寄港地であるベネズエラについてその歴史を聞く。ベネズエラはマラカイボ湖の油田が埋蔵量世界一という産油国でありながら、貧しい国で現在は政情不安な国である。どうしてそうなったのかということを書くと切りがないのでここでは省略する。今は亡きチャベス大統領が 21 世紀型の社会主義を掲げて改革を行い、ところが 3 年前に彼が亡くなったために今その寄り戻しがあつて政情不安になっている。彼の反米路線は有名である。

あまり関係ないが、個人的にはチャベス大統領が 1956 年生まれで私と同じということに驚く。国に革命をおこし、アメリカ合衆国を敵に回し思い半ばで闘病して死んでしまう。かたや私は定年までサラリーマンをして、船旅に出ている。

話を戻すと、その政情不安のために日本の外務省が発する渡航先警戒レベルが 1 から 2 に引き上げられており、数日前に行われた航路説明会でも今回のベネズエラへの寄港は慎重に検討中ということになっている。

ただ、ベネズエラ政府からは今までの友好親善の歴史を大切にしたいので政府が保護するので是非寄港してほしいというメッセージがきている。NGO ピースポートとの交流の歴史は重く、とてもありがたい。約 1000 人という観光客の経済効果の期待もあるだろう。

そして別の船内企画で、例の温泉好き、山好きの通訳のオーストラリア人がラテンアメリカの国々を紹介する。メキシコ出身の通訳も加わりなかなか興味深い。

メキシコは北アメリカに位置するという。確かに NAFTA（北米自由貿易連合）に属しアメリカ合衆国（USA）、カナダ、メキシコはその構成国なので、北米である。今まで私の認識ではメキシコを中南米と思っていたが、とんでもない間違いである。それくらいこの地域のことを私は知らない。

そもそも南北アメリカ大陸の両方をアメリカと呼ぶ、それが基本認識なのである。日本人の多くがアメリカと呼んでいる国はアメリカ合衆国（USA）であり、メキシコもメキシコ合衆国なので、単純に合衆国でも間違いである。

やはりラテン語を話すアメリカ、つまりラテンアメリカがわかりやすい表現になる。ラテンアメリカから見るとカナダや USA はアングロアメリカと呼んでいる。アングロサクソン人が多いからだろう。うむ、一つ勉強になる。

これから寄港日を除くほぼ毎日開催し、8 カ国を紹介してくれる。今日はそのイベントの予告編でラテンアメリカ全体を大雑把に紹介してくれる。

船内も私もラテンアメリカに染まっていくようで、これからは楽しみである。

PEI できれいなゴルフ場を見たので、本日船内ゴルフ練習場に行く。弾道はわからないのでスイングの調子とボールのつかまり具合の確認くらいになる。相変わらず船の揺れが微妙にスイングに影響する。それでも北大西洋に向かってのゴルフスイングは気持ち良い。

今まで太平洋、インド洋、紅海、地中海、バルト海、大西洋に向かってゴルフの練習をしてきたが、そんな世界の海に向かってのゴルフスイング経験はそうはできない。

さすがに北極海では寒くてそんな余裕がなかったが、本日の正午の気温は 13°C で日本の 3 月くらいであるが、これから一週間するとベネズエラに寄港するので、季節はいきなり真夏の暑さになる。船旅は時差ボケがないが、季節は一週間で変わっていく。今日はヒートテックにトレーナーを着ているが明後日くらいから半袖を出さないといけない。

夜、居酒屋で飲んでいると若者が混ぜてくれと言って、仲間に入ってくる。20 才でダンサーを志す青年は、日本酒の熱燗を注文して一緒に乾杯する。何を話したかあまり覚えていないが、こんな若者と話ができるのはこの船だからかと思う。それにしても 20 才でこの経験ができるのは幸せと思う。そして彼も幸せと言っている。

## ■ラテンアメリカの国々

ラテンアメリカの紹介シリーズをここでまとめて記載しておく。

まずメキシコである。メキシコ出身の通訳がメキシコを紹介してくれる。メキシコと言えばチリだそうで、メキシコのことわざで「チリのない一日は、太陽のない一日である」というそうだ。そのくらいチリが料理に使われる。

モレと呼ばれる見た目がカレーライスのような料理を勧められる。味はカレーライスとは全く



違うようでソースにはチョコレートも入っていると。

食べる場所はレストランではなくともかく絶対に屋台をと勧められる。

そんなことを本物のメキシコ人から臨場感あふれて聞いていたらメキシコに行きたくなってくるから不思議である。

次はベリーズである。知らない名前の国で、旧名称はイギリス領ホンジュラスと聞くと何となく聞き覚えがある。

マヤ文明の地にそれでも征服者スペイン人が入ってきて、その結果現在は複雑な入り交じりの人種構成になっている。登場人物は先住民のマヤ族、征服者スペイン人、そしてスペイン人がアフリカから奴隷を連れてきたのでアフリカ人、この3種が混血をつくり、あるいは純潔のままに現在の人種構成になっている。この地域ではそのようなことが多いらしい。

そしてキューバである。チェ・ゲバラとカストロが革命をおこし、カストロが50年かけて築いた国の紹介である。

オバマ大統領がキューバ訪問してアメリカ合衆国と国交を回復したのでこれからは大きく変わると思うが、本日の企画でキューバを紹介するのはスペイン語通訳の彼女で2年前に2カ月の取材経験からの紹介なので国交回復前の話である。

古い建物、穴凹だらけの道路で写真を見る限りは、怪しい街並みである。でも社会主義で治安もよく安全な国であるという。平均月給5000円で職業による差がない、学校は全て無料なので知識レベルは高いという。ただ資源がなく、産業もないので国全体は貧乏のため自国生産のものは安い輸入品が高いので工業製品を中心に物価が高く、低い月給とのアンバランスが顕著だという。社会主義で物乞いはいないという。貧乏だけど人々は楽しく暮らしている国と紹介者は語っている。

彼女は電気水道ガスがない自給自足農園の友人の家で生活した話をしてくれた。人生の中で最も思い出に残る滞在だったともいう。貧乏だけど人々は暖かく迎えてくれた。

冷蔵庫がないので食事は保存しないので旬なものを食べる分だけ収穫して食べる。そして牛肉は食べない。宗教上の理由ではなく生活上の理由からで、牛は貴重な農器具でキューバは牛の絶対数が少ないので食べることを禁止したらしい。

インターネットも普及していない閉ざされた国である。それはそうであろうインターネットはアメリカ合衆国が軍事用に作ったものを転用して普及させたのでアメリカ合衆国だけがドメインに自国の名前を付けなくて良いようになっている。だから国交が無いキューバでは普及しない。

今後は国交が樹立されたので、アメリカ合衆国文化が一気になだれ込むので、今日のような話は古き良き時代の話になるだろう。

アルゼンチンの紹介である。アルゼンチンとは銀の国という意味で、その首都ブエノスアイレスとは空気がきれいという意味だという。

料理は肉料理が主体である。チョリソーを半分にしてパンにはさんだホットドッグのようなチョリパンがいけるという。イタリア移民が多いことからピザも多くの国民が食べるという。

マテ茶というお茶が有名で、飲み方として金属ストローで回し飲みをするという。ストローで

間接キスをする訳だ。

ペルーが紹介される。ペルーの歴史や観光について紹介してくれるが何も知らない人が聴くにはいいかもしれないが、あまりに初級で物足りない。そんなことはガイドブックに載っている。

たとえ全く知らない人が対象でも、行ったから体験したエピソードくらいは必須であろう。それが臨場感であり、聴きにきて良かった感なのである。

#### ■世界の海を見ながら飲むバーカウンター

朝起きたら晴天でもう暖かい。半袖でウォーキングしている人もいる。昨日やおとといは手がかじかんでいたが、今日はもうそんなことはない。急速に夏に向かってるのがわかる。

今日はビール半額の日ということで、昼間からビールを飲んでいる。正確に言えば半額ではなくて1本買うともう1本サービスということで、結局2本飲むことになる。昼間から後部デッキのパノラマバーのカウンターで航跡を見ながら飲むのは最高である。カウンターに座るとカウンター越しに船尾の向こうの海を見る。だからこのカウンター席は座りながらにして世界の海を見て飲むことができる。

横浜を出航して太平洋から始まり東シナ海、南シナ海、マラッカ海峡、インド洋、紅海、地中海、北大西洋、ドーバー海峡、バルト海、北極海、そして今また北大西洋にいる。

船で知り合った友人と旅の話をする。次はどこに行こうか、私の行きたい場所を話すと彼もまた話してくれる。彼は来年夏にマッターホルンを登りたいという。スイスに滞在してアタックのチャンスを待つので一カ月くらいかかりそうだという。

一カ月という旅の長さはちょうどいいかもしれない。先日会った旅の達人も言っていた。私も一カ月の長期滞在旅行というのを考えている。

船旅も2ヵ月を過ぎてくると長いというのが正直な感想である。船旅ではなく船上生活と化していることに気が付く。

しかし船上生活の中でもこのパノラマバーは心休まる場所で、遙か水平線に目をやると何となく地球が丸いのだという光景を感じつつ、旅の話をする。この船で私の最も好きな場所かもしれない。

#### ■洋上結婚式

朝起きると雨模様の雲空で、船は揺れている。デッキに出ると生暖かい風になっている。正午の海水温は26℃にもなっている。

張り出されている航路図では昼前にはバミューダ諸島沖を通過するコースをとっている。言わずと知れたバミューダトライアングルの一角である。バミューダ諸島とフロリダとプエルトリコを結ぶ海域をこのように呼ぶが、霧が多いので船や航空機の事故が絶えない海域である。

本船はこの海域をかすめるように航行する。曇天はそんな影響もあるようだ。

ついでにバミューダ諸島はあのひざ上丈のバミューダパンツの語源となったもので住民は男女

ともにはいているという。

夕方から洋上結婚式がある。若い男女の乗客がこの地球一周の船旅の中で結婚式をあげたいという希望で乗船前から準備して乗り込んできたという。昨夜の船内テレビでそんなインタビューがあった。新郎になる彼だけが出演していたが緊張しまくってガチガチの様子が伝わってきた。本番の結婚式はもっと緊張するだろう、大丈夫か。

自主企画という位置づけで結婚式を友人に手伝ってもらいながら準備しており、昨日も何人かの女の子がプールサイドで大きな布を出していたので聞いてみると結婚式の準備という。この船に乗る費用は当然かかるが、それ以外の費用はほとんどかけないようで、お金の使い方としては面白い。これぞまさしく自主企画であろう。

大西洋上の結婚式とは一生思い出に残るだろうが、バミューダトライアングルだけに行き先を見失わないようアドバイスしたい。

結婚式は船長立ち合いのもとに出席者 200 人くらいが祝福する。残念ながらブーケトスで年配の名物おばさんがブーケをとってしまい、若い女の子たちはがっかり、そして周囲からブーイングが聞こえる。最初から取ろうとしていたらしく一番前に陣取っていたが、常識の無さに驚いてしまう。司会者はもう 1 回と言ったが、2 回行うブーケトスなど聞いたことがないし、時すでに遅く式は進行している。この船には本当にいろいろな人が乗っていることを改めて感じる。

#### ■いろいろな人が乗っている

PEI で迷子になったおばあさんは現地警察に保護されたという、ただ船には間に合わなかったので乗っていない。次の寄港地で合流して、今後のことを考慮して飛行機で日本に戻ってもらうようである。

別件で、スタッフの対応が悪いというので、おばさんが若いスタッフに突っかかっていたという。理由は分からないが、うちの会社の弁護士を使って訴えると大きな声で言っているという。

みんなの注目は集まるが、それはおばさんの威厳ではないことは明白であろう。

講演でも一番前の席を陣取って聞いているかと思えば、編み物をしている人がいる。さすがに講演者が怒ってやめさせたという。

本日の講演でも私は一番前で聞いていたが、それでも隣のおじいさんは眠っている。反対側をみても 10 人中半分くらいは眠っている。お年寄りだからしょうがないか、でもそれならば一番前の席に陣取らないでほしい。

常識の無さやモラルの低さがどンドン目に余る。この船はどこに向かっているのだろうか。

ピースボートピープルという言葉が浮かぶ。平和ボケした難民船というような日本語訳が付くだろう。

#### ■カリブ海が待ち遠しい

「カリブ海ではじけよう」という洋上フェスが催される。最初は後部デッキを予定していたが突然のスクールで船内に変更になる。カリブ海という言葉の響きは良いが、実際は船まだバミュ

ーダトライアングルなので天候不順である。

さて、フェスには英会話教室のクラスメイトが出場している。彼は78才くらいだが、パワフルだ。ギターの弾き語りというよりはクラシックギターにアンプを付けているので。まるでエレキギター片手にプレスリーを思い起こすステージである。普段は懐メロを自主企画でいつもやっていておっとり型の熊のプーさんのような人だが、今日はパワフルで素晴らしい。人間は年をとってもやればできるという気持ちにさせてくれる。

英会話の先生方と通訳のバンドの演奏も聴く。彼らのキャリアはトークショーなどで紹介されているが皆それなりに苦勞をして人生を生きている。

その彼らがウクレレ、アコーディオン、ギター、ドラムを持って歌っている。練習時間も取れないと思うがそれなりにうまい。特に英語の歌の発音とリズム感は抜群である。やはり楽器でも、手品でも、踊りでも何かできるといろいろ役立つことが多い。

聞いていたら実にうらやましくなってくる。私も大学時代のギターを復活させて、昔のレベルまで何とか弾けるようになりたいと思い始める。

#### ■お金持ち

居酒屋仲間のKさんの紹介で比較的大きな会社の会長だった人と同席する。仕事に追われ奥さん孝行してこなかったのが、奥さんへの感謝を込めて夫婦で乗船したという。問題はこの船をあまり理解せずに乗ったことで、乗ってからびっくりしたという。

一般的に世界一周クルーズなるものはドレスコードのあるレストランで食事をして、社交ダンスやプロのエンターテインメントに興じる中流社会の交流を想像する。スーツを5着持ってきたということからその準備や期待は検討がつく。私も地球一周の船旅に出ると友人に言ったらば、社交ダンスはできるのかと言われたことを思い出す。

この船はドレスコードがないどころか、ひどい服装でやってくる人がいる。せめてゴルフ場のレストランでのマナーくらいは守ってほしいが、それもかなわない。

ドレスコードだけではなく食事の内容や周囲との会話もおおよそ想像していたものとは大きく異なっていたのであろう。

彼の言い分は、自分が良く調べなかったのがいけないとしながらもお金のことはいいから一番上等な部屋にしてくれと旅行会社にたのんでいたが、普通の部屋があてがわれた。

部屋の問題はヨーロッパで帰国する人がでたので最近是最上級の部屋に移ったという。それまでは昼間からバーで飲んでしたが、今度は部屋で酒を飲んでいるという。

そういった不満でストレスが溜まっており、気心がある程度知れた人とだけ酒を飲むようで、私は友人の紹介で同席させてもらったが、彼の気持ちは理解できるので少し気が許せる友人にしてもらったことになったのだろう。夫婦で飲もうかと誘われる。

そもそも顧客への提供価値が違う船に乗ってしまったから、彼のストレスは下船するまで解消されないだろう。これも期間が3カ月を超える旅だからちょっと我慢するという程度で済まない。

初めての船旅だというから、尚更かわいそうである。これに懲りずに飛鳥Ⅱや外国の大きな有名な客船に乗ることを勧めておいた。いろいろなミスマッチがここでも起きている。

日本出航前に全8回の短い乗船前英会話教室があったので、私もそれに参加していた。

その時のクラスメイトで集まって夕食でも食べようということで、久しぶり何人かで集まる。日本にいた時とはまた違う一面を見ることができる。ある夫婦は大学の薬学部を卒業して奥さんも薬剤師で二人の子供はとも医者という。何となく教養や気品があるのも理解できる。

その彼の誕生日があるので船内誕生会に出席をお願いされる。誘っていただけるのは誠に光栄である。年齢を尋ねると79才になるという。これもまた驚きで、先日の旅の達人と同じである。

夕食の話は尽きない。他愛のない話が続いたが、ロシアの美術館で知り合いがお金をすられた話が出てくる。所持金38万円をすられたという。なぜそんな大金を持って寄港地に降りたのか問うと、知り合い曰く金庫に入りきらなかったので持ってきたという。

そんな金持ちがこの船には乗っているのかと一同驚く。本当にお金はあるところにはあるのである。

#### ■妻が英会話！？

英会話教室が3学期に突入する。3学期といっても開講時間が夕方になるくらいで特に変化がある訳ではない。

変わってきたことと言えば、妻が英会話に意欲を持ち始めたくらいであろう。昨日のフェスにも英語の通訳がついていて、バンドの紹介やインタビューを日本語の司会のあとに英語に翻訳をする。この翻訳内容を気にかけて聞いていて、こう訳すのか、とメモしており今朝はそんな会話で始まる。

やはり最低限の英語力がないとしょうがないということを肌で感じたようだ。頭では当然理解していたことだが、この長い航海で寄港時は当たり前にしても、ベッドメイキングをしてくれるハウスキーパーやレストランや居酒屋のウェイターでも英語の会話になる。

そういえば一昨日の夕食も英会話教室の先生とクラスメイトたちと待ち合わせをして一緒にテーブルで英語のみの会話の食事であった。クラスメイトは既婚者もいるが夫婦で乗船している人はあまり英会話教室には入らない。私のように妻を残して一人で英会話教室に入るのは珍しい。そのためにクラスメイトで食事をとろうとなったが、私だけは妻同伴で来てくださいということになり、妻も参加しての会食になる。

もう2ヵ月以上も一緒に船にいれば、クラスメイトも妻も知っている。先生に至っては乗船間もないころには同じテーブルで食事をし、それ以降も船内イベントで会うのでよく知っている。

日本に戻っても英会話は上達に向けて、何かしていくことを考えよう。

#### ■地獄に仏

船に乗ってからタヒチアンダンスを習っている妻の友人からの頼みでCDをコピーしてほしいというので対応する。ただ複製するだけなので何のことはない作業であるが、10分くらいで3枚のコピーを終わらせると彼女は早さや手際良さに驚き感謝感激している。

彼女のこの感覚は、航海に出るから頻繁に私自信が経験する感じである。寄港地で切符の買い

方が分からないで四苦八苦していると地元のおばさんが教えてくれる時や、言葉が通じない時に通訳してもらったりした時などである。ある人には普通のことかもしれないが、それが分からないので困っている人にはさまに地獄に仏のように感じるのである。

日本にいた時はあまり経験しないこの感覚は、自分の世界の閉鎖的なことに気づかせてくれる。慣れ切っているのとチャレンジしなくなるのだろう。

## 第三章 カリブ海

### ■カリブ海に突入

船は現在モナ海峡の手前にいる。西インド諸島のドミニカとプエルトリコの間がモナ海峡で、この海峡を抜けるとカリブ海になる。

なぜ西インド諸島なのか、コロンブスはアメリカ大陸があるという認識がなかったのでインドに到着したと思い込み、このような名前になった。その話は有名であるが、最近ではコロンブスがアメリカ大陸を発見したという表現は使わないという。

ヨーロッパ人にしてみれば発見でも既に先住民が住んでいたのが人類としては発見でも何でもない。だから最近の教科書などではコロンブスのアメリカ大陸到達という表現を使う。

3回目の避難訓練がある。回数を重ねる度にだんだん緊張感がなくなってくるような気がする。集合して全員の名前を読み上げて点呼をとる。ここで私語を話している人がいるから、点呼が聞こえなくなり、結果時間がかかる。全く理解できない。

本日の船内企画は沖縄デーという特別の日になっている。1945年6月23日に沖縄守備軍司令官が自決した日で、この日を「沖縄慰霊の日」と定めている。本当は明後日であるが、明日と明後日はベネズエラ寄港なので、船内では本日に前倒して実施している。

沖縄戦全記録というNHKスペシャルで放送したビデオを見る。沖縄での戦闘記録が生々しく映し出される。住民を巻き込んだ戦争が米軍、日本軍、住民の視点から記録されている。

証言の中で日本軍は軍隊の体をなしていなかったという。軍隊の役目は国民を守るもので、沖縄戦は住民を犠牲にして戦争を遂行していた。

太平洋戦争は私が生まれる10年以上も前のことだが、軍隊は何のためにあるか改めて考える機会である。ついでに1か月半前には自衛隊に守られてインド洋を航海したことも思い出す。

夕方からバーベキュー（BBQ）がある。シンガポール寄港の前日にも参加したが、その時は午後1時頃からの開始であったが、今回は夕方になったので暑さの面ではだいぶ違う。

日の入りの時間は6時57分なので夕日がカリブ海に沈むのをねらっていたのだろうが、あいにく夕日は見られなかった。ただ心地よい海風にあたりながらの船上BBQは格別で、大盛り上がりを見せる。

船上生活を2ヵ月以上こなしてくると、知り合いの人数も増えて、何となくグループができて

くる。BBQの申し込みは6~10人なのでそのくらいの間人間関係ができてくる。

バンド演奏に合わせて踊る人、誰かの後ろについて踊り、さらにその後ろに誰かがついて、そしていつしかみんなが一つの列になり輪になっていく。この船ならではの光景になる。

そんな盛り上がりの中で、もくもくとビールを運んだり、写真を撮ってくれたり、片づけたりしているクルーがいるのがありがたい。彼らの存在なしにはこのやりたい放題のBBQは存在しない。

#### ■ベネズエラ政府が歓迎

ベネズエラのラグアイアに入港する。南米大陸へは人生初の上陸である。

ベネズエラは現在インフレが著しいと聞いていたが、それを上陸前に実感する。船内で両替をすると、一人10USドルつまり1000円ちょっとであるが、現地通貨ボリバル・フェルテでは厚さ2cmほどの札束になる。財布に入りきれないので札束のまま一人一束ずつ持ち歩くことにする。

首都カラカスまでは1時間余りだが、国内情勢が悪化しており自由行動でカラカスに行くのが禁止されている。

物価が安いのでオプションツアーも安くて良いが、最初に乗ったバスのエアコンが効かなくて蒸し風呂状態なので、出発前にバス交換になる。これは先が思いやられそうである。



ガイドは外務省の若い青年が乗り込んでくる。彼は軍人で、外務省へは出向しているという。がっしりした体で、いかにも軍人というのは納得する。

ガイドからいろいろ話を聞く。この国の歴史と英雄たち、明るい国民性とその暮らし、そして平均的な月収に話が及ぶと車内は皆驚く。なんとおよそ3000円だそうで、現在もインフレが進んでいるので生活は苦しい。21世紀型社会主義を標榜していた故チャベス大統領は貧困をなくすべく政府が家を建てたりして対応していたが、現実には厳しい。都市部に住めないで山の斜面に多くの家がある。それは静岡県の熱海の別荘地帯のように見えるが相当に貧しい家並みで、道路はゴミ箱と化している。

現在もインフレで食べられない人々が多いので食料配給をしているという。カラカスの市街地では食料の配給に並ぶ行列が見られる。

ただ、石油の埋蔵量世界一という産油国なので車は高いがガソリンは安い。ガイドの話では満タンにして1USドルくらいという。

4F というチャベス元大統領の廟に行く。なぜ 4F かというとチャベスが革命を起こした日が 2 月 4 日 (4 February) から取っている。この建物の中を見ていくとチャベスは本当に国民から支持をされていたのだということがよくわかる。熱狂的な国民性からかもしれないが、政治に少し冷めている日本ではちょっと考えにくい。

このチャベスに並んで、いやもっとすごいかも知れないのがラテンアメリカの英雄サイモン・ボリバルである。ベネズエラだけではなくラテンアメリカの国々をいくつもスペインから独立させた英雄である。だからベネズエラの正式国名はベネズエラ・ボリバル共和国なのである。ともかくベネズエラはこの二人の英雄が際立っている。

このツアーにはベネズエラ政府の外務省の役人が同伴しており、なぜかこのツアーだけなのだが、記録用の TV カメラクルーも同行している。ベネズエラ政府が責任をもって対応するという言葉を裏付けるような動きである。

だからなのか分からないが、ベネズエラの中では高級なレストランでの昼食になる。イチゴジュース、サラダ、チキン料理、山羊ミルクのチーズ、トウモロコシの粉のパン、ユカイモというサツマイモとジャガイモの中間のようなイモ料理が出てくる。さらにバンドの生演奏も付いている。チキンは炭火で焼いたもので味もしっかりとしている。地元の人はこの店では食べられないのだろうが、ちょっと感激してしまう。

店を出るとベネズエラの国旗をあしらった帽子が全員にプレゼントされる。これも政府からのプレゼントということで、こんなことまで気を使っただき申し訳ないといいつつも、いい土産になる。

食事が終わり、街をツアー客みんなで散策する。前方にガイドと外務省の役人、そして後方からは警察官が 5 人も同行している。

警察官の同行がなくても治安についてはそんなに気にしなくてもよさそうな気がする。人々は明るく陽気である。日本人が珍しいと見えてすぐに話しかけてくる人も多く、みんな手も振ってくれる。中にはニイハオなどと言ってくる輩もいるが、ともかく友好的である。スリランカのほうがよほど怖い感じがする。

さて、散策のあとはホットチョコレートの試飲ということで小さな店でいただく、寒い地方の飲み物かと思っていたが、この暑さの中でも結構いける。これも政府のプレゼントらしい。美味しかったので常温保存可能な粉末のホットチョコレートを現地通貨 1000 ボリバル・フェルテ、日本円なら 200 円ほどで購入する。

1 時間ほど散策をしてトイレ休憩ということで、古い大きな建物に入る。ここはなんと外務省の建物で、400 年くらい前に建てられた宮殿をいまでも使用しているという。2 階建ての立派なもので会議室では会議を行っている。街中でトイレを使用するために外務省のトイレを使うとはなんということだろう。確かに安全といえば非常に安全である。

街中の小さな土産物店によつての買い物であるが、店の前は警官が守ってくれているので心配ないが、なんだか変な感じもする。土産物は安い。特に手作り品が安く、T シャツなどの工業製



品は高い、多分 Made in China だろう。したがって手作りのマラカス、置物を購入それぞれ日本円で 120 円、140 円である。

あとはバスに乗って帰るだけということでバスをよく見るとナンバープレートが無い。ガイドに聞いてみるとこのバスは外務省ご用達なのでナンバーは不要という。何かあっても車体に書かれた文字や数字で識別できるから良いということである。日本ではとても想像できないがここはベネズエラなのである。

船に帰って、ひと段落して夕方の光景を見るためにデッキにあがると、なにやら 20 人くらいの集団がやってくる。昼間の TV カメラクルーも同行してカメラを回している。

船のスタッフに聞いたら外務大臣が船内視察しているという。気が付くとすぐ目の前にベネズエラの外務大臣がいる。正確に言えばこの人が外務大臣だと船のスタッフに言われたのだが、映画俳優のような感じで若い紳士である。すぐに写真をお願いして一緒に取ってもらう。今日は何と幸運な日である。

### ■ベネズエラの夜

夜はベネズエラの人々との交流フェスティバルがあるので、浴衣を着て行く。ところが会場まではシャトルバスでピストン輸送すると聞いていたが、ピストンとは遠く及ばなく少ないバスで往復しているので、バスに乗るまで 1 時間も待たされる。

約 500 人を 30 分程度で運ぼうとすると一回の往復の時間とバスの人数に渋滞などを考慮すれば、おのずと必要なバスの台数は決まってくるのに全くなっていない。アマチュアの仕事である。現場対応のスタッフに文句を言ってもしょうがないが、明らかに計画ミスである。かわいそうなのは現場である。設計した人でなく、実際に対応に苦慮するのは現場である。

私も現役の時には設計者だったので、同じようなことを沢山して、現場に迷惑をかけてきたことを思い出す。反省しきりである。

交流フェスティバルは私にとっては現地通貨の残金消化フェスティバルとなる。持ってきた現地通貨を今買わないと明日は使えるか分からないので、土産物をさらに買う。波の音が聞こえる不思議な竹の棒が 400 円、竹のビールカップも 300 円、妻の手作り帽子も 600 円である。

それからこの会場は現在州政府の施設であるが、かつては奴隷の売買が行われた施設だという。言われてみれば建物の中は何となくそんな構造をしている。ただ私の人生において奴隷の売買というのは本や映画の世界だけであって、その現場にいるというのはすごい経験になる。分かっていることとそこに居るといことはやはり違う。

イタリアに行った時のガイドの言葉で「遺跡の見学は当時を想像しろ」と言う言葉を思い出す。

帰船後に後部デッキでビールを飲む。ラグアイアの山の夜景、昼間と違って美しい。

なぜかと言うと山肌は貧民街で山の中腹まで家が立ち並ぶ、家といってもレンガで作られた至ってシンプルな建物で、自分たちで建てたものであろう。それらが無造作に、無計画にバラバラに作られている。そして山の斜面の沢になっている部分にはゴミが捨てられていてゴミの沢に化していて、遠目にみてもとても住めない。

昼間はそんな光景なのに、夜は明かりしか見えない。山肌をかたどるきれいな夜景である。

今日は盛りだくさんの経験をした、初めての南米大陸は実に面白い。



そして私たち家族にとっては6月22日という日が特別な日である。同居していた私の母が3年前に亡くなった命日になる。もしも母が生きていれば、この旅には出られなかったと思う。海に向かって手を合わせる。

長期の船旅は自分たちの健康や資金面だけではなく、家族の環境にも大きな影響を受ける。

#### ■エル・システマ

ベネズエラのラグアイア寄港の二日目になる。今日のオプションツアーはエル・システマというベネズエラの音楽教育活動の見学体験コースをとっている。スペイン語のエル・システマは英語ではザ・システム、日本語では「その仕組み」と訳せる。つまり音楽教育の仕組みがそのまま名前になっている。

1975年にベネズエラの経済学者ホセ・アントニオ・アブレウ博士が創設した。貧困層の子供たちに楽器を与え、指導してオーケストラに加わるという音楽を通じた幼少年教育システムである。そして41年間で成長し続けて、世界中に広がりを見せている。

この創始者のアブレウ博士は経済学者、そして政治家、音楽家なので、このようなことを思いつき実行できたのである。

ちょうど半年前に山梨県出身の医学生理学でノーベル賞受賞した大村教授の足跡を訪ねたが、大村教授もまた、学者であり経営者であり芸術家という側面を持っている。それが一つの集大成としてノーベル賞受賞で評価されたのだが、病院経営や美術大学学長、温泉施設やそば屋までその幅広さが人間は必要なのだとその時もつくづく思った。

さてエル・システマについて、基本的なその運営は当初民間の基金で運営されていたが、現在は国家予算での運営になっている。

オーケストラはその技量のレベルに応じて一軍、二軍、三軍など分かれているというが、一軍世界各国のオーケストラと共演できるほどのハイレベルで活動実績もすごい。二軍でも十分上手なレベルであるという。今回ベネズエラから40人程この学生たちが乗船するというが、一軍は無

理なので、その下あるいは青少年の部隊が乗船する。一部はパナマで下船するが、最終的には 25 人ほど横浜まで一緒に旅することになる。

その本部は首都カラカスにあるので、そこを訪れる。鉄筋コンクリート 7 階建てくらいの建物で入口が芸術的で素晴らしい。



この中に練習室が 91 か所、演奏するホールがいくつかあるようで一番大きなホールを見学させてもらう。このホールは 800 人程収容できるという大きなもので、壁は木製でできていて三角の木製の吸音の出っ張りがある。これで音の反射や共振を抑える役目を担っている。椅子にはきれいなデザインの背尾たれやクッションが張られていてホールの壁と調和している。

別の小さなホールで 4 人組の若手音楽家の演奏を聴く。楽器は一人がビオラとバイオリン、一人がベース、一人がウクレレとギターを合わせたような民族楽器、そして最後の一人は打楽器とボーカルである。クラシックのオーケストラだけかと思っていたら、この 4 人でラテンとクラシックとジャズの融合のような音楽を演奏する。そして腕前も素晴らしい。若手のホープという紹介であるが、プロでどこでも通じるレベルである。いやもう彼らはプロであろう。

船に乗ってから町内会のかくし芸のような音楽ばかり聞いていたので、久しぶりに心の底から響く音楽を聴くことができたのはありがたい。完成度の高い音楽というのはそんな力も持っていることを改めて実感する。

午後はラグアイアの音楽教育学校を訪れる。ここもエル・システマの学校の一つで、地域に根差しているのでいくつかあるうちの一つということになる。

小学生くらいの子供たちが演奏を披露してくれる。入れ替わりに 4 つのオーケストラを聞いたが最後は外にある半野外ホールでの演奏を聴く。外には海も見える。もちろんカリブ海でエメラルドグリーンに輝いている。こんなところで音楽教育を受けているとは羨ましい。貧困から救うというのは十分に達成できているように思える。

子供たちは無邪気で明るい。演奏が終わり交流会になるとみんな日本人のところによってきてサインをねだったり、折り紙を折ってもらったり、楽器の交流も始まる。けん玉をやったりもしている。半紙と墨を持ってきて子供の名前を漢字で書いてあげるのも人気がある。ワイワイガヤガヤと会場は大盛り上がりである。

妻が折り紙を折っていると次から次へと子供たちが折ってくれとやってくる。私も飛行機を折

ったがうまく飛ばない、昔はよく飛んだのにとおもってもう少し練習をして来れば良かったと悔やむ。

船でいつも絵を描いている人が子供たちの似顔をさらさらと書いている。大人気で待ち行列ができています。もう時間だというので似顔絵をやめてしまったら泣き出してしまったそうで、大変である。

船がなかなか出航しない。理由は二つで、エンジェルホールに行ったツアーが戻らないためと、もう一つは船底の調査のためらしい。船底の調査を上から見ていると潜水士が2名潜って船底の様子をファイバースコープで見ている。

グリーンランド沖で流氷の海を航行したので、流氷が船底にダメージを与えたのかもしれない。

### ■カリブ海のオランダで橋に感激

キュラソーという今まで聞いたことのない島国の首都ウィレムスタッドに寄港する。この国はカリブ海にある。面積444平方kmというから東京都の2倍くらいの広さで、そこに人口14万人しか住んでいない。事前情報ではとにかく海がきれいな島という。

歩いて簡単にまわれるのと治安が良いということで何も下調べもしておらず、行き当たりばつたりの行動になる。舷門で現地の地図をもらい、早速街に繰り出す。

ヤシの木に海風、ホテルやレストラン、土産物店などのリゾート施設が小規模ながら一通りそろっている。ベネズエラに比べれば各段ときれいな街である。この国は現在もオランダ王国の構成国で、かつてはオランダ領だったので、オランダ風の建物が並んでいる。日本の長崎にあるハウステンボスに南国のリゾート地を足したような街をイメージすると良い。

ここの面白い観光ポイントは **Queen Emma Blige**、日本語に無理やり訳せばエンマ女王橋になる。橋の片方を支点に反対側が陸から離れて開閉する仕組みになっている。

正確には橋ではなく船である。フロート橋とも言うべきでもので小さな船が15隻ほど横並びになっていてその上に道路が渡されている。その小さな船と道路が一体になっていて横に長い船を構成している。横方向つまり橋でいえば長さが約200m、船の全長つまり橋の幅約20mくらいの橋とも船とも呼べるものなのである。その上を人間か自転車が渡ることが出来る。

なぜこんなフロート橋の構造になっているかと言えば、この橋の上流には石油精製施設があるので、その関係の船が出入りする時に橋が邪魔になるので動かす必要があり、片方を支点に反対側が陸から離れて一点を支点にする弁のように最大90度回転する。

通行する船の大きさによって開口角度が変化する。小さい船は45度くらい、大きな船の場合には90度開口し支点にしている側の岸に完全についてしまう。この橋を動かすために支点側でない方にエンジンとスクリュウがついている。だから操舵室も小さいながらもその近くにある。

橋なので24時間通行は可能であるが、開閉は船が通過するときなので不定期である。開閉に要する時間は90度開閉時には20分かかる。リゾート地に架かる橋としてはのんびりしていて良いが、ビジネスマンが利用するにはちょっと厳しいかもしれない。この島はリゾート地だからそんなことを考える必要はないかもしれない。



このフロート橋を考えた人はすごいと思う。ロンドンブリッジのように橋げたが上がるのを考えた人もすごいと思うが、このフロート橋はもっとすごい。少なくとも私にはそんな発想が出てこない。

会社生活で科学的手法ということで、商品企画や事業企画のためにアイデア出しの手法をいくつか学び訓練していたことを思い出す。

しかし、発想法や訓練も重要であるが、実際に見聞きをして体験によって見聞を広めて頭を柔軟にしていくことが大切かもしれない。橋は空中に架かることではなく、兩岸を結べれば良いのである。

この橋は世界の珍しい橋という特集があれば必ず取り上げられるだろう。

#### ■イグアナ、トカゲ、ワニ

橋を渡ったくらいでそんなに歩いてはいないが、喉が渴いたので水分補給という名のもとオープンカフェでビールを飲む。フロート橋近くのイグアナという名のカフェに入る。

大きなイグアナのオブジェが置いてある。ここに来る途中の公園でもたくさんのトカゲを見ることができたが、日本のトカゲよりも大きく、少しカラフルで頭が大きい。ここは南米であることを改めて感じる。

昼前からビールを飲んでいると時々フロート橋が開閉する。その時には観光客は皆写真を撮っている。写真には開閉したフロート橋、そしてオランダ風のカラフルな建物が似合う。空の青さとエメラルドグリーンの海が包み込んでいる。そんな光景を見ながらゆっくりとリゾート気分を満喫しているのはこの上ない贅沢かもしれない。

トカゲやイグアナの話で盛り上がるので、ついでにワニの土産物を買う。30cmほどの木製のワニの置物、いやおもちゃと言った方がいいかもしれない。ワニの体をくねくね動かすことができる。木製なのにどのようなになっているのか不思議なのと形も動きも本物に似ている。

日本でも蛇のおもちゃなどがあるが、子供だま似的な感じが否めない。こちらの方がはるかにリアルな感じが夫婦ともに気に入ったので早速買うことにする。

1匹のつもりがもう1匹、もう1匹と最終的には6匹になる。6匹で40USドル、だいぶ値切

ったがこの辺が限界で手を打つ。この街は独自通貨があるものの US ドルがそのまま通用する。

#### ■ 帰船前に船が出航した

夕方のフロート橋はライトアップされて、とてもきれいである。橋の上に大きなリング状の照明がついている。15 隻の橋脚フロート部分に一つずつあるので、15 のリングが時間とともに赤、青、黄に別々に変化する。残念ながら 15 のうち 3 つくらいは電気が切れている。メンテナンスをあまりしていないことが分かるが、いかにも南のリゾート地と言ってしまうかもしれない。



カリブ海に浮かび、オーシャンドリーム号もまた、夕日を浴びて美しい。

四季のある日本でも枕草子にもあるように「夏は夜」である。南の国もまた夜が主役でいろいろな思い出をつくってくれる。

船に戻ろうとすると向こうからスタッフの集団がやってくる。話を聞くとこれから船が出航して先ほどのフロート橋を越えたところにある栈橋に移動するという。だから今から戻っても乗船できないので、フロート橋に戻りその向こうの栈橋まで行ってくれという。彼らはそれを誘導するためにやってきたという。

帰船リミットは 21 時で、今は 20 時である。なぜ 1 時間ほど待てないのかと聞いたが、ともかくそのような当局からのお達しらしい。100 人か 200 人はまだ陸地にいたのでかなり危ない決断のように思う。既に暗くなっており、陸に残っている乗客全員を誘導できるかという点極めてリスクが高い。

きっと一人や二人は船に戻れないのかもしれないと妻と賭けをするが、二人ともトラブル発生に賭けたので成立しない。

リスクが回避できれば、あの夜景がきれいなフロート橋が開いて、兩岸の街並みを見ながら上流に行って残りの乗客を乗せて再出港するというのは最高のサービスになるかもしれない。

待つことおよそ 1 時間でフロート橋に船が現れる。地元の人々も大きなクルーズ船が現れたので驚いている。少しライトアップされた白い船体に各船室の窓からの明かりが映えている。船は汽笛を 3 回鳴らして橋の前を通過する。汽笛の大きさやその光景にも地元の人々は驚き、歓迎している。まあ、粋な演出と言えれば非常に面白い。

その後の乗船を待つことさらに 1 時間、ようやく船に戻り情報収集を図る。突然の栈橋移動の理由は、キュラソー当局からの突然のお達しということしか分からない。

問題は全員帰船できているのか、居酒屋で飲みながら出航を待つことさらに 2 時間、既に 24 時近い時間になっている。やはり全員戻ってこないのを探し回っているのかもしれない。出航の気配がないので部屋に戻って寝ることにする。

## ■ラテンアメリカやるね

朝 7 時に船内放送が入り、タグボートの手配の関係で出航が 9 時 30 分になるという。タグボートは昨晚待機していたのに不思議である。昨晚出航しなかった理由は全く触れていない。ただ、本日の朝 9 時 30 分出航になったが、次の寄港地への影響はないという。

経緯説明もないまま全体のスケジュールには影響ありませんという、日本でよく聞く言い訳パターンに聞こえてしまう。

それにしても昨日までの寄港日 3 連続カリブ海沿岸の国々はとても良い印象を残してくれた。私たち夫婦の間では「ラテンアメリカやるね」という感想で統一される。次のパナマやグアテマラも期待できそうである。いや、あまり期待していなかったのが良かったのである。期待どおりではだめで、最低でも期待以上、全く予想できなかった体験は大きな感動を受ける。

確かに北欧や PEI に比べてラテンアメリカの期待度は低かった。

ベネズエラ出航からエル・システマの青年たちが乗船しており、時々船内で見かけるようになる。スペイン語の挨拶もよく聞こえる。船の揺れが大きいので注意してくださいという船内放送が聞こえたが、スペイン語も最後に加えられ国際色豊かになってくることを実感する。

日本文化に触れるのも、このような船に乗るのも初めてのようで、船内に案内板を写真に収めている。なぜだろうかと妻に話すと、漢字の表記が珍しいのではという答えが返ってくる。確かにベネズエラでは漢字は全く見なかった。

船の生活もさることながら、横浜に行ってきたと全てのことに驚くに違いない。地球のほぼ裏側のまだ見ぬ国に何を期待しているのか聞いてみたくなる。そうかそのためにはスペイン語が必要か。

朝食の食卓でも同じ話題が出る。まず乗船して驚くのはきっとトイレではないかという。清潔で紙が常設されているのはベネズエラでは珍しい。

あるいは食事であろう、4 階のレストランの夕食は日本食が基本なので日本食をどのように感じるか。そして箸は使えるのだろうか。いろいろな意見が出る。

そして若者たちが増えたというのがこの船にとっては良いのかもしれない。この船に乗っている日本の若者たちよりもさらに若い青少年がもたらす活気に期待してしまう。

## ■ベネズエラを振り返る

伊高さんのベネズエラを振り返るという船内講座に参加する。旅行会社の担当スタッフを入れての振り返りで、裏話などが聞けてなかなか面白い。担当スタッフというのがツアー企画を 1 年前から行っており、3 週間前から現地入りしている。

今回の政情不安は、日本国内や海外の報道では治安悪化や物資不足がかなり深刻に伝えられていたという。いろいろ情報が入ると人間不安になるものだが、海の上で情報を遮断されていると何も感じないからかえって良かったかもしれない。

報道とは事実を伝えることは当たり前としても、伝える側の意思を入れるのが昨今の報道の在り様である。そうすると事実はそのとらえ方によって印象が全く異なることになる。そしてそれ

らが情報のシャワーのように降り注ぎ、全てを見聞きしていてられないので、報道機関を絞りこんでいくとその報道機関の主張に知らず知らずに同調していくことに気が付く。

実際に私たちが訪れたベネズエラはそんなに深刻な事態ではなかったような気がする。悪い方に持っていかうとする勢力の思惑がきつとあったのかもしれない。

ベネズエラは昔でいう階級闘争の中にいる。被支配階級と支配階級とのせめぎ合いで、被支配階級はチャベツ大統領の推し進めた政策の恩恵を受ける人々で、支配階級はチャベツ以前に国を支配してきてチャベツの出現により利が得られなくなった人々である。後者の背後にはアメリカ合衆国の利権がついている。

この2派のせめぎ合いが続いていて、チャベツ存命中は圧倒的にチャベツ派が多数であったが、カリスマ指導者がいなくなると状況が均衡するようになる。その緊張度が増したのが昨今の政治情勢である。

実際の政情不安や物資不足はどうだったかというのを先に現地入りしていた旅行会社担当者は聞いていたほどの心配はなかったという。

地下鉄にも普通にのって移動するが、別段問題なく利用できたという。

地下鉄は地元の人たちの足でみんなが利用しているという。日本では地下鉄で小さな子供連れの母親は子供が泣くと気を使うが、ベネズエラでは泣いたら周りの乗客があやしてくれるという。生活を陽気に楽しんでいる国民性が見えてくる。

物資については外国人には実のところは見えないかもしれないが、受け入れ先の担当者の話ではインフレで余分なものは買えないまでも生活必需品は何とか買えるという。

そんなことよりも、私たちが入港するちょっと前では雨が全く降らなかったのが水力発電による発電量が急激に減ったために、政府機関が省エネのために週に5日休んでいたという。そのために打ち合わせには大いに支障をきたしたという話を聞く。日本の省庁では全く考えられない。

最後にこの船がベネズエラに寄港すること理由、意義について聴衆から質問が寄せられる。

ベネズエラは故チャベツ大統領が掲げた21世紀型の社会主義革命を推進中であるが、人類の壮大な実験を見ているようだという。それが当然他のラテンアメリカ諸国にも大きく影響を及ぼしている。この視点が最も重要であると井高さんは答える。

そしてあの貧困の子供たちを救うエル・システマの存在も大きい。

さらに船の重油が安いからともいう。確かにベネズエラ寄港中は給油作業をしていた。ガソリン価格から察すると船の燃料油も相当安いはずで、船の運航費用の面ではメリットが大きい。

ついでの話で、この船を動かしている重油はC重油ということで重油のランクでは最下位のランクを使用しているという。だから煙突からは黒煙がモクモクと出ている。朝にデッキにあがると燃料カスがデッキに結構散らばっている。

この船にはいろんな人が乗っている。現役を退いた船の専門家からの情報である。

## ■通訳は人と人との架け橋

スタッフ紹介のトークショーに行く。本日は居酒屋でよく一緒に飲む英語通訳のRちゃんが登場する。彼女はまだ若い日本生まれ、3才からアメリカ、小学生は日本、中学高校がオースト



ラリア、大学以降は日本という典型的な帰国子女である。その帰国子女だからしょうがないというのが嫌で様々なチャレンジをしてきた。

外国の学校ではない先輩後輩の上下関係を理解するために日本の大学ではわざわざ体育会系のクラブ活動に入ったという。確かにあの上下関係は日本独特の世界かもしれない。そして時間があればボランティアに行き、地域や子供たちのために通訳というスキルを活かして貢献している。

それにしてもやはり日本のことを知らなすぎるという。歴史、観光で日本文化を説明できない。京都も行ったことがないというから日本をよく知る外国人からの質問には対応が大変らしい。それは通訳することにも影響するのだろう。

しかしながらまだ若いのに彼女は通訳として生きていくという目標をもっており、それは具体的に「人と人との架け橋になり、人々を笑顔にする」という言葉で締めくくる。

## 第四章 パナマ運河

### ■パナマは間近

この旅のあと一カ月という日程になる。日本との時差は14時間になる。地球の反対側を越えて明日はいよいよパナマである。海水温も上昇して29℃になっている。つい2週間前の流氷海域では海水温0℃だったのが信じられない。

日高さんの最後の講座に行く。明日寄港するパナマの話で面白いことをいろいろ聞く。

パナマは太平洋と大西洋を結ぶパナマ運河とその運河に架かるラス・アメリカス橋によりアメリカの十字路になっている。

この国もアメリカ合衆国の国益のために、翻ろうされることになる。パナマ運河が通行できないならばアメリカ合衆国の東西海岸の艦船は南米大陸南端まで回らないといけぬ。戦略上極めて重要な運河なのである。このパナマはコロンビアの一地域であったが、アメリカ合衆国がこの運河の使用権を得るために独立させて、実質的な支配権を握る。

父親のジョージ・ブッシュ大統領の時代にパナマ侵攻を行ったが、表向きの理由以外も教えてくれる。大統領としての実績がなかったので進行したとか、パナマのリゾート地で息子が麻薬漬けの毎日をおくっていてその逮捕記録を抹殺するためにやったとか。その証拠を無くせたのでその息子が後の大統領になることができたという。本当かなという話でもある。

パナマ運河は閘門方式という方式を採用している。スエズ運河と違って砂漠に水路を掘れば済むのではなく、山を越えて船を通さないとはいけぬ。そのために山の中腹にガトゥン湖という大きな人造湖をつくりその人造湖まで船を上げるために閘門でしきり、注水して船を上げていく。

その構造上通行できる船の大きさが限られている。この上限をこの業界ではパナマックスと呼んでいる。このパナマックスよりも大きな船は、遙か遠回りをしないとはいけぬ。

そのために第二次大戦ではアメリカ合衆国は大きな軍艦を造ることを諦めざるを得なかった。だから戦艦大和が世界最大の戦艦なのである。巨大戦艦をつくらなかったことが空母や航空機時

代へと早く舵をきることになり戦争を勝利に導く戦略になるとは皮肉なことである。日本は何も制約がないので巨大化のみを目指していた。

さてそのパナマックスを拡張する工事が行われて、2016年6月26日の本日がその開通式になる。これでほとんどの船はパナマ運河通行が可能になる。

さらにパナマの隣国ニカラグアでもさらに巨大な運河計画が実行に移されており 2025年開通を目指している。このニカラグア新運河はその実現性や収益性には疑問の声が多くあるが、この工事を受注したのは中国企業というので、こんなところにも中国の世界戦略が見えてくる。

パナマックスは船の全長 305m、幅 33.5m、深さ 12.6m。

新パナマックスは船の全長 427m、幅 55m、深さ 18.3m。

一方でニカラグア運河計画は全長 466m～502m、幅 64m、深さ 21mである。

### ■パナマ運河鉄道

パナマの大西洋側の港町クリストバルに寄港する。朝から雨模様で、蒸し暑い。

この街の名は有名なクリストバル・コロンブスの名前からとったもので、この港町に隣接するパナマ第二の都市の名はコロンという。

今日はパナマ運河鉄道に乗って、太平洋側に出て首都パナマシティに行きそして再び大西洋にかえって来るというオプションツアーに乗る。

パナマ運河鉄道はコロン駅から出発する。コロン駅までバスに乗って移動するが、あまりに街が汚く、スラム化している。単に古いだけでなく、ゴミだらけの街で本当に汚い。私もいろいろ海外旅行に行ったがこんなに汚い街はあまり見たことが無い。さらに付け加えるとラテンアメリカでもっとも治安が悪い街という。

パナマについていろいろ現地ガイドから聞く。

パナマ運河の通行料収入は国家財政の 25%というからまさしく運河で成り立っている国である。だからパナマの国民の平均所得は約 7 万円なのに、パナマ運河のパイロットはその 20 倍という。パイロットとは船の案内人のことで、大型船が狭い運河や港、氷河海域などに入る場合には操舵の指示を出すために船に乗り込んでくる人をいう。

パナマ運河は約 80 km で大西洋の街コロンから太平洋の港街バルボアに通じる。パナマシティはバルボアの隣にある。バルボアという地名もスペインの探検家の名前からとったもので、彼はヨーロッパ人として初めて太平洋を発見した人物である。

この運河に沿って列車は 1 時間で走り抜ける。運河ができる前はこの鉄道で大西洋太平洋の港間の物資輸送をしていた。運河ができてからはその需要がなくなり閉鎖していたが、観光用に再開され今は一日一便が定期運行している。100 人以上集まれば臨時列車を出してもらえるとのこと、私たちは臨時列車で大西洋から太平洋を鉄道で移動するという初体験をする。

車両に乗り込むと天井が高く、ゆったりした座席である。木目調の車内は映画に出てくるオリエント急行のような感じである。列車の幅は標準軌で新幹線と同じだが、新幹線は座席 3 列 2 列構成なのにこの列車は 2 列 1 列構成になっている。そして全て対面式のソファになっていて真ん

中に大きなテーブルがある。

各テーブルにはあらかじめ軽食のようなものが置かれており、暖かいコーヒーの無料サービスもある。1 車両に一人ずつそのサービスを提供する女性が配置されている。

出発前に列車の隣にはやや小ぶりのワニがいたので乗客は写真を撮るのが忙しい。こんな駅構内にワニがいるとはさすがにパナマかと感じる。キュラソーではお土産にワニのおもちゃを買ったのだからこちらでは当たり前の光景なのだろう。

列車はゆっくりと走りはじめ、やがてガトゥン湖を眺める車窓になる。世界の車窓からというテレビ番組でも紹介された鉄道で、添乗員の女性が気を利かせて世界の車窓からのテーマ音楽を流してくれる。

ガトゥン湖は熱帯のジャングル地帯に船を通行させるために堰き止めた人工的に作った湖なので、たくさんの朽ち果てた木々が湖面に頭を出している。映画の八ツ墓村を思い出す。

木は 4 万本ほどあり、それらを買付けようと中国の企業がパナマと交渉しているという話を聞く。真偽のほどは知らないが木は水に浸けて硬化させるというので、100 年以上も根を生やして水の中にあるので硬くて良い建築材になるという。恐るべき中国である。

そんな光景を見ながら列車は比較的早い速度で通過していく。途中で駅はなくノンストップで太平洋へと向かう。

途中は湖とジャングルの繰り返しで、ジャングルを抜けるとゴルフ場もある。このゴルフ場ではワニも出るのだろう。

パナマシティは都会である。海辺に近い地区は金融街で高層ビルが何十も建っている。先ほど見てきたコロンは全く異なる街の風景を見る。さすがにアメリカの十字路のパナマの首都である。

パナマシティの歴史地区カスコ・アンティグオは世界遺産に登録されている。その地区を 1 時間ほど散策するツアー行程になっているので、カテドラルやフランス広場などを見て回り土産物屋にもよるが、どうもあまり感動がない。ベネズエラに比べて近代化されており、キュラソーに比べてリゾートでもない。私には運河だけの国のように見えてしまう。

## ■パナマ運河通過

朝 6 時前に船内放送が流れる。あと 1 時間ほどでパナマ運河の第一閘門に到着するという。

パナマ運河は閘門式運河といわれ、海面よりも 23m 高い湖面のガトゥン湖を経由して大西洋から太平洋へ、あるいはその逆に船を通す。したがって 23m の水位の差を克服するために水門を使用している。運河水門は高低差克服のために 4 つある。

大西洋側の第一水門が開いて、第二水門との間に私たちの船が入る。すると第一水門が閉まって、第一水門と第二水門の間に船が留まり、そこへ注水して水位が 8m くらい上昇した段階で注水を止める。

注水は 23m 上にあるガトゥン湖の水を利用するのでポンプなどは無用である。注水によって上昇するのが、ちょうど船がエレベータに乗ったような感じである。注水は 5 分間ほどで一杯になる。次に第二水門が開いて船は第二水門と第三水門の間まで移動する。

この時に船を移動させているのは船自身のスクリュウではなく運河の両側に配置されている機

関車である。機関車が左右それぞれ 3 台ずつ合計 6 台で船をワイヤーロープで結んで牽引する。機関車はレールの上を走るがレールとレールの真ん中に歯車がかみ合う凹凸がついていて機関車自身の歯車と噛合わせるのでスリップしないで牽引できる。この機関車は日本製という。

船が第二水門と第三水門の間に入ったら、また注水して上昇させる。

次は第三水門が開き、今度は第三水門と第四水門の間まで船を移動させて、第三水門を閉じて、また注水して注水が終わった段階で水位はガトゥンと同じ水位になっているので、あとは第四水門を開ければ船はガトゥン湖に出ていくことが可能になる。第四水門が開いてしばらくは機関車で牽引されていたがワイヤーロープが外れて自力航行に切り替わった。

このワイヤーロープが外れる直前に事件が起きた。6 台に機関車がワイヤーロープを外すタイミングに差があって、船の右舷後方を運河の岸壁にこすってしまう。ちょうど自動車で縁石にホイールをこするようなものであるが、白い粉のようなものが舞い上がる。白い粉は船体の白いペンキであろう。

これには船が悲鳴を上げているように感じる。この前は氷山で、今度は運河かよと船の叫び声が聞こえる。

パナマ運河には今書いたような閘門システムが大西洋側に 2 つ、太平洋側に 2 つ、合計 4 つある。したがって大西洋から同時に 2 隻がガトゥン湖に入ることができる。注水を考えると私たちの船が第四水門を出たあとに、ガトゥン湖からその水門にタンカーが向かっていったが、これが効率的であろう。

水はポンプでくみ上げるものかと思っていたら、ガトゥン湖の水が豊富なので注水はこの水を下に移動させるだけである。



パナマ運河は約 100 年前、1914 年に開通した。もちろんアメリカ合州国の技術と財力で実現させたが、いろいろな経緯の末に 1999 年にパナマに所有権が移った。

この運河の方式では船の大きさは限界があり、それがパナマックスと呼ばれている限界値であるが、これを大幅に緩和する新運河が完成し昨日開通した。その記念すべき日の翌日にこの運河を通行できるのは幸運である。ただし、私たちの船が通行しているのは旧の運河である。新運河は通行料がきっと高いに違いない。

ちなみに旧運河の方でも通行料は大型客船で約 3000 万円、私たちの船は中型程度なのでそこ

まではいかないだろうが、結構な値段であろう。しかしあの仕掛けを見ると十分納得できる。

通行料の最低価格は人間で、冒険家が泳いで渡った時の通行料は 36 セント、約 36 円だ。

ガトゥン湖で待機すること 3 時間、出番待ちである。この運河は多分夜間の通行を制限しているようである。何しろ機関車で引いたり、水門を閉めたり人間の作業が必要なため暗くなると支障があるので明るい時間に通過させているようである。

船上では、パナマ運河航行記念バーベキューメニューなるものが販売されている。フランクフルトソーセージを炭火で焼き、冷えた生ビールも売っている。当然、私も冷えたビールを飲む。

ガトゥン湖の中の地形は複雑で、山と谷を堰き止めて湖にしたのでまるで宮城県の松島のような風景の島々を見ることになる。

その間を抜けていくのにパイロットの言うように操舵するのは困難なので、リーディング・ライトと呼ぶ目標を見て操舵士が操舵するようになっている。リーディング・ライトとは進行方向に目印になる縦長の標識が二本ある。二本の標識は手前と奥に前後に配置され、奥の方が高い位置にある。操舵士はその二本が重なるようなコース取りをすればよいようになっている。

ガトゥン湖から太平洋にでるのには水門が 5 つある。なぜ一つ多いかという二つの水門を抜けるとガトゥン湖より小さいが湖に出る。湖なので注水や排水ができないので、1 つ水門が多い。

原理は上って来たのと同じで注水ではなく排水になることだけが違う。排水するというのは水門で堰き止めていた水を次の水門の向こう側に流すだけになる。

ガトゥン湖から出る時にヨットとクルーザーが私たちの船の前に入り、同じ水門を使用して太平洋に抜けていく。クルーザーはニュージーランドの記載があるがヨットは分からない。

小さな船はそのためだけで水門操作を行うと効率的でないので大きな船といっしょに入るようである。機関車の牽引もなく自力走行をする。ヨットは双胴船なのでエンジンがついていないから二つ船はロープでつなげており、クルーザーが引っ張って水門を移動する。

朝 7 時に大西洋の第一水門に入り、夕方 5 時には太平洋に面した最後の水門が開き自力航行により太平洋を航行し始める。東側には昨日見てきたパナマシティの高層ビルがかすんで見える。

約 10 時間のパナマ運河通過劇場はここで閉幕である。9 階後部デッキのバーでビールを飲んで乾杯をする。ありがとう大西洋、よろしく太平洋。

## 第五章 グアテマラに向かう

### ■人間は群れを好む

いよいよ太平洋の航行で、競馬や陸上競技でいう第 3 コーナーを回っている気分になる。

船内は一週間後に予定されている洋上運動会に向けて盛り上がり始めている。そして至る処でオラというスペイン語挨拶が聞こえ、スペイン語の風も吹き始めている。エル・システマの若者

が 25 人乗船しているからである。

この頃になると船内は仲良しグループのようなものが出来上がっており、その仲間以外は会話になかなか入り込みづらい。乗船して 1 カ月くらいまでとは大きく違う。あの頃は新しい友達をつくろうということで、一人でいても何人か集まってもそこに入り込もうとすれば誰でも受け入れる雰囲気があったが、今は排他的でとても知らない人たちの中に入り込むことには勇気がいる。勇気を出して入り込んでも、あまり歓迎されていないことに気が付く。

1000 人もいれば一度も話していない人もまだたくさんいるはずだが、これは日本人特有のものなのか、あるいは年配者特有なのか、人間の習性なのか分からないが、ある種の村社会が形成されているのに気が付く。

きっと被災地や難民キャンプなどでも同じかもしれない。最初は誰とでも助け合い、そして知り合いが増え、グループが形成されていく。何となくリーダーのような人も決まり始めて群れと化していく。

群れの大きさはともかくも大体は自分が主に所属する群れが決まってきてその仲間だけで過ごすようになる。しかし中には一匹オオカミもいれば、複数の群れを掛け持ちする人もいる。

そんなことも考えるとこの船は実に面白い実験場でもある。

#### ■北極旅行は踏んだり蹴ったり？！

パナマ運河を通過したのに北極の話とは時季外れではあるが、北極のオーバークランドツアーのことを詳しく聞く機会を得る。もちろん私たち夫婦は行っていないので、興味深く聞くことになる。

アイスランドからノルウェー経由で北極圏の島にまで飛んで、船で北極圏を一週間かけて回り、ベネズエラで本船に合流するというツアーで、費用は約 100 万円という豪華ツアーである。そこに行った人からいろいろ聞くことができた。15 名参加でその平均年齢は 75 才、最年少は 70 才、若い女性添乗員 1 名が同行と、聞いただけで大変そうな旅である。

最年少 70 才の彼の話では、各手続きをする時に小グループに分かれることが多いので添乗員一人では見切れない。そのため彼が添乗員補佐をして、誘導や各種書類記入まで行ったという。

悲劇なのは彼の荷物だけが行方不明になってしまい、一週間は荷物なしで過ごしたという。薬、本、パソコン、下着の替えもないまま過ごす。サウナが船についているのでサウナに入る前に下着を洗濯してサウナで下着を乾かすという生活をしていたという。

乗船客約 100 人のうち日本人はその 15 名のみで完全に日本人の村社会をつくっていたという。そもそも北極という極寒の地に欧米の乗船客は何を目的にいくかというと主に写真の愛好家たちで、彼らは良い写真を撮るために 1 時間でも 2 時間でも被写体を待ち続ける。日本人一行はコンパクトカメラでちょっと記念撮影をしておしまい、これでは差があり過ぎる。

しかも 15 名は外国人とのコミュニケーションをとりたがらないので英語は一切話さずに日本語だけしかしゃべらない完全に浮いた存在だったという。

レストランでの注文やホテルのフロントへの対応は全て添乗員任せで、Please も Thank you も言わない。外国人の常識からは完全に逸脱している。

何回かの上陸の際にはゴムボートに移るのだが、その場合でも高齢者なのでゴムボートをまたげない。何でこんな人達がこの北極の船に乗ってきているのだろうと思われたらしく、一緒にゴムボートに乗りたくないということを言っているという。

暖冬しかも天気恵まれず、一面真っ白な世界を期待していったが、島は土が露出して雪があまりない。流氷も少なく冰山もあまりない。船は極地観光用の砕氷船ではなく一般のクルーズ船なので北極点に近い氷山地帯にはいけないらしい。

期待外ればかりなので、現地では何かないかと現地の犬ゾリツアーに添乗員に頼んで申し込む。しかし雪がないのでソリは無理で、ソリの代わりに車輪のついた乗り物を犬が引くだけだという。犬ゾリではなくて犬車だという。

ところがそのツアーは当日になって、いつまでたっても犬車が現れない。不思議に思い添乗員が確認すると、添乗員の顔が真っ青になる。日にちを一日間違え翌日のツアーに申し込んでしまったというミスが発覚する。キャンセルも前日なのでできないし、その当日は既に島を離れている。乗客の中では添乗員がかわいそうだからツアー代金はあきらめようという空気と、今までの期待外れ感から金返せという空気が混ざり大変だったという。

結局は旅行会社が費用負担することになったというが、当たり前なのが当たり前でできないことが信じられない。従業員のミスでも会社の業務なので会社の責任は当たり前で、そのミスを負担するのも会社である。従業員教育や再発防止策は別の話である。そもそも極地へ高齢者を引率するのに添乗員一人というのは理解できない。

極めつけは、ベネズエラまでの帰りの飛行機で日本人全員の荷物が行方不明になり、荷物は未だに届いていないという。既に本船はベネズエラからキュラソー、パナマと港を後にしている。踏んだり蹴ったりの北極旅行である。

#### ■エル・システマのコンサート

エル・システマの紹介コンサートに行く。まず、驚いたのは入場の仕方である。全員で歌を歌いながら会場の後方入口から踊りながらの入場である。正確に言うと先頭で全体をリードする一人に続きギターとパーカッション、あとは歌って踊りながら入ってくる。ラテンアメリカ特有のノリで会場は陽気になっていく。そのままステージ中央で1分間くらい歌って挨拶となる。

そして演奏は22人のオーケストラなので弦楽器、打楽器、管楽器とひととおりそろっている。演奏と演奏の合間にメンバー紹介になる。まず一人ひとりが日本語で自分の名前、年齢、担当楽器、そして好きな食べ物とか職業などを自己紹介する。年齢は18才から30才くらいまで平均は23才くらいで、弁護士、一児のパパ、学校で音楽を教えている人もいる。

25人が乗船しているので残りの3人の紹介はカメラマン、ドクター、コーディネイターという。25人という少ない人数なのに医者を同伴させるというのは、これが単なる親善旅行ではなく、プロとしての演奏旅行という位置づけにしているのだろう。

演奏は実にうまい。船に乗ってから町内会の演芸大会に慣らされてしまった私の耳には天使のごとく聞こえる。

アンコールにも対応してくれる。アンコールはアカペラの歌で始まりみんなで歌う、入場の時のノリに近い。楽器が徐々に加わり盛り上げていき、最後はみんなで歌って終了する。

構成はコーディネイターからの指示か、みんなで考えたのか、いつものとおりなのか分からないが、よく考えられている。

短い1時間のお披露目コンサートは終わり、最後にこのメンバーの世話をしてくれる人や日本に行ってから案内やホームステイ先などの募集がある。

日本での案内などは是非してみたいが帰国後は定年退職後の手続きなど重なり、予定がやや不透明である。

外国の友人が日本に来たらどこを案内するかという質問をしたり、受けたりすることがあるので時々考えているが、近いところでは半日くらいならまずは東京、鎌倉あたりになる。一泊できれば京都、奈良かもしれない。そして私は温泉を勧めたい。

エル・システム以外に24人の外国籍の人々がパナマからグアテマラまで乗船している。彼らはラテンアメリカの平和構築と国連が提唱する17の持続可能な開発への取り組みを通じてラテンアメリカ地域の紹介、相互コミュニケーションやリーダー育成をするために乗船している。

そのため船内の様子が一段と国際的になっている。外国籍の人と船内ですれ違った時にはスペイン語のオラで挨拶していたが、ハローも加えないといけないか。パッと見た目では分からないので面倒くさいのでコンニチワにしよう。

## ■UKのEU離脱

UK(イギリス)の国民投票の結果、EU離脱が決定した。ベネズエラにいる時に入ってきたニュースであるが、本日はこの船でもそのことを受けて企画が行われる。そのニュースの補足説明とコメンテータとしてUK出身の英会話の先生3人によるコメントを聞くというニューストークショー的な内容である。

離脱への理由はコメンテータの話を経ると難民への恐怖心、離脱による雇用への期待、EUに払う上納金が主な理由らしい。

国民投票の問題点として、投票者の知識不足、そして報道の誘導を言っている。メディアは視聴率が基本で、残留よりも離脱の方が国民の関心度が高いのでそちらに誘導したくなる。

そしてUK国内でも賛否に差があり、若者は残留だが年寄りや離脱という世代間の差、そしてスコットランドや北アイルランドは離脱反対で、イングランドに離脱派が多い。

スコットランドは昨年UKからの離脱を僅差で防いだが、EUに残留したいので再び独立の国民投票の動きがあり、独立すればEU残留になる可能性は高い。

北アイルランドもまたUKかアイルランドに属したいかという根深い問題がある。今日初めて聞いた話では北アイルランド住民はアイルランド国籍とUK国籍の二重国籍が許されているそうである。補足するとアイルランドはEUに加盟しており、イングランドやスコットランドのあるブリテン島の隣にあるアイルランド島の大部分を占める独立国である。UK領の北アイルランドと接しており、北アイルランド住民がアイルランドとの統合に動けばEU残留になる。

UKが抱えるこの離脱問題は二重構造になっていることに気が付く。つまりUKというイギリス連合王国の構成国であるスコットランドが離脱したがっているのを必死で止めながら、UK自



身もまた EU を離脱するという選択をしたことになる。それは UK というよりもイングランドの選択かもしれない。

イタリアのローマに行った時の旅行記でも書いたが、昔のローマ帝国はその最大支配地域が今の EU 加盟地域に似ている。ヨーロッパというのは集散を繰り返してきた長い歴史を感じる。

さて、本日も比較的前の席に座ったので周りを見回すと午前の早い時間帯なのに相変わらず眠りに入っている人たちがたくさんいる。家でテレビを見る感じで会場に来るのであろう。せっかくタイムリーな話題を現地出身の人の生の声を聴けるこの機会を得ているのにもったいない。

この企画に参加することが重要で中身は重要ではないのだろうか。日本人のムラ社会参画意識で他の人々と同じでないかと心配になるという現象で、これもまた日本を象徴している。

だから日本では、独立や離脱などは到底起きそうもないことを学ぶ。

#### ■グアテマラはコーヒーだけでない

グアテマラのプエルトケツアルに寄港する。私の知識ではグアテマラはコーヒーしか思い浮かばない。そしてその港町プエルトケツアルは今まで聞いたこともない。今日から一泊二日のオプションツアーで有名なマヤ文明のティカル遺跡を訪れる。ツアーは 78000 円と高価だが、ここまで来ているのだからといういつもの論理でこのツアーに乗る。

さて、船は太平洋の港に着いており、マヤ文明はユカタン半島の内陸で栄えたので遺跡までは遠いので飛行機で行くことになる。問題はこの田舎の港町には飛行場はないので、なんと近くの軍用空港からアビアンカ航空の民間機をチャーターしていくという行程になっている。

銃を持った軍人が何人か入口にいて、簡単な検査を通過し 68 人乗りのジェット飛行機に乗り込む。軍用空港でもチャーター機は民間機なので CA もいて、サンドウィッチやビールも配ってくれる。化粧は濃いがなかなかの南国美人で愛想も良い。チャーター機、しかも美人 CA では、料金が高くなるのはしょうがない。久しぶりに 1 時間の飛行機の旅を楽しむ。

ペテン・イツ湖という大きな湖があり、その中に小さなフローレス島という島がある。ここは橋でつながっているのでバスで島に入ることができる。このフローレス島がティカル遺跡の玄関口になるので、本日はこの島の観光をしてからこの島のホテルでゆっくり過ごす行程になっている。

#### ■フローレス島を探索

島の探索の前にレストランで昼食をとるが、レストランは湖に突き出していて半分は水上にある。私が座った席の下は板と板の隙間から湖面が見える。レストランからちょっと乗り出して下を見るとたくさんの魚が泳いでいる。

この魚が料理で出てくるのではと思ったが、魚料理ではなく肉料理である。大雑把に切った野菜の炒め物と一緒に鶏肉、そして白米がワンプレートで盛り付けされて出てくる。白米は日本のご飯ではなくパサパサのインディカ米である。そして辛いチリソースとケチャップの間のような調味料が各テーブルに置かれており、これをかけて食べるようだ。トルティーヤのような平べったいパンも出てきて、これに野菜と肉を挟み、先ほどのチリ調味料を少しくわえるとなかなか旨

い。

私たちのテーブルのちょっと奥にそのトルティーヤらしきものを延々と生地から延ばして焼き続けている女性調理人がいる。そういえば先ほど出てきたトルティーヤらしきものは温かく、柔らかかったのは焼きたてが出てきたからなのか。彼女はこの百人以上入るレストランのトルティーヤを一手に引き受けている。

写真を撮っていいかと尋ねると快く承知してくれた。民族衣装風の白い料理衣装に身をつつみ、まん丸い顔をしたお婆さんはどこか人なつこい。それにしてもただでさえ暑いのに、厨房の中で鉄板の前に立ってご苦労さんである。



食事の最後はグアテマラコーヒーでしめくくる。濃厚な味のコーヒーで、比較的酸味は少ない。何しろグアテマラについてはコーヒーしか知らないので、せめてこのコーヒーくらいは味わって飲まないと申し訳ない。ただ、主要輸出品であるが地元の人にとってコーヒーは高級品らしくあまり飲まれていない。

この島は人口 2000 人、島といっても 500m の橋でつながっていて周囲 1 km か 2 km で神奈川県の江の島くらいの大きさである。

小さな島なので徒歩で観光する。突き刺すような暑さというのはこんなことを言うのだろう。島の真ん中に教会があり、教会の前には公園がある。公園の中にある木々の下で日差しを避けて休んでいるとハチドリを見たという人がやってきて教えてくれる。ハチドリらしき鳥を私も写真を撮ったが、何しろコンパクトデジカメで残念ながら識別できない。

島内の交通は東南アジアでトゥクトゥクと呼ばれている三輪タクシーが多く走っている。地球の裏側のアジアの乗り物がここでも見られるとは思わなかったが、発展途上国では確かに乗り易いし、費用も安いので普及するのであろう。

そして自動車といとなぜかピックアップトラックのようなものが多い。ガイドの話では仕事に使うということで乗用車に比較して税金や費用が安いらしい。

島の土産物店で面白そうな竹で作った打楽器を見つける。竹筒状のもので 30cm くらいの横長で直径 10cm くらいの竹の節から節までを輪切りにして、真ん中のくり抜いた部分をたたくことにより竹筒内部と共振していい音色を出すのもで、外は絵の具で模様が描かれており、グアテマラと文字も入っている。

ラテンアメリカ最後の寄港地ということもあり置物にしてもよさそうなのでこれを買う。一杯

飲みながら宴会の小道具として盛り上がりそうである。

金曜日の夜ということもあり、若者中心に人々がホテルの傍にある広場に集まってきて夜中まで大騒ぎが続く、街の飲み屋も小さなメインストリートもたくさんの人が出ている。最近の日本では味わえない若者パワーを感じながら寝ることにしよう。

ホテルは便利などころにある反面、こんな騒ぎに巻き込まれることもある。それにしても防音については何も考えられていないよう建築である。

#### ■ティカル遺跡はすごい

マヤ文明はユカタン半島を中心に広範囲に広がっていて、今の区分ではメキシコからグアテマラ、ベリーズにまでにまたがる。紀元前から10世紀頃まで栄えて、スペイン人が征服に来た時にはすでに衰退していたという。

ティカル遺跡はマヤ文明の中でも最大の遺跡である。フローレスのホテルからバスで1時間程走ると、ティカル国立公園の入り口に着く。この国立公園は広く、さらにバスで15分程ジャングルの中を走るとレストハウスがある場所に出る。ここからバスを降りて徒歩で3時間のティカル遺跡見学ツアーになる。

ジャングルといっても車も通れる広さで舗装されている道もある。舗装といってもアスファルトではなく石灰を固めたもので、材料はジャングルの中にある土なので自然保護は考えられているようだ。道の上は木々が生い茂り直射日光を遮ってくれるし、舗装のせいで虫も少ない。

事前情報では虫対策で長ズボンや虫よけスプレーが必要とか、日差し対策で帽子や長袖シャツ、日焼け止めクリームが必要とか書かれていたが、そんな必要は全くない。明らかに観光客とわかる一団は半ズボンにタンクトップで来ている。それに対して我々日本人の一団はというと長袖、長ズボン、手袋、スカーフ、帽子という姿で浮いている。

時々ガイドが木の上の方を指さして猿がいるとか教えてくれる。蛇やトカゲは会わなかったがうさぎのような小動物も多くいる。そんなハイキングを楽しんでいると忽然とピラミッドが現れる。

ティカル遺跡のピラミッドは神殿と呼ばれ1号から6号まで番号がついている。発掘の順番で付けた番号がそのままになっている。それ以外の複合施設はコンプレッホと呼ばれている。忽然と現れたピラミッドは双子のピラミッドのコンプレッホと呼ばれるもので、東西と南北に対をなしている。このピラミッドの半分は階段が見えていて明らかにピラミッドであるが、その反対側の半分は木々が生い茂り小高い山に見える。

なぜか対をなしているはずのところにピラミッドがない。木々が生い茂る山がある。ガイドによれば、この山はまだ発掘していないピラミッドで、土に覆われてその上に木が生い茂っている。一見すると小山に見えるが山としては確かに不自然である。この熱帯雨林のジャングルで1000年以上の年月が経つとピラミッドも山と化してしまう。

ティカル遺跡最大のピラミッドは4号神殿で64mもある。マヤ文明の中でも最大という。これを登るのだが、階段はあまりに急なので観光用に木の階段が作られており、登ると約10分でピラ

ミッドの上の祭壇部分に着く。ここからは遺跡が一望でき、素晴らしい眺めを楽しむ。遙かに続くジャングルの途中で他の神殿の頭の部分が2つほど見ることができる。

3号神殿は建築年が810年ということでこの遺跡でもっとも新しい。何故そんなことがわかるのというと神殿やピラミッドの前には石碑が残されており、その文字を解読した結果わかったという。ともかくこの810年の神殿が最後に作られた神殿で、その後はこれらの建物は捨てられ、他の地域に住むようになったという。19世紀になって発掘が始まるまでジャングルの奥地でひっそりと土に覆われていた。

それにしても810年といえば日本では平安京に遷都して間もない、平安初期である。

大広場という意味のグラン・プラザに出る。この広場の東西に1号神殿、2号神殿があり、この神殿の写真がこの遺跡の紹介によく使われている。1号ということはここから発掘が進んだということになる。

「遺跡は想像力を持って見る」というあの言葉をまた思い出す。



南米のインカ帝国はスペインに滅ぼされてしまったが、このマヤ文明は既に滅んでいた。これらピラミッドや神殿は見事な建造物であるが、なぜこんな神殿をのこしたままこの地を捨てて他に移ってしまったのか、食料問題だとか言われているが実のところは分かっていない。